クールマチャクラについて

井　田　克　征

0．序：クールマチャクラとは

インドにおいて，亀は古くから大地と関係付けられてきた。例えばそれはヴェーダ祭式では，アグニチャヤナの火壇の下に埋められ，人を天界に導くとされている[1]。そしてまた乳海攪拌の神話において，亀は沈みかけたマンダラ山の支えとなっている[2]。このようなイメージをも継承しつつ，12世紀以降のタントラ文献においてはクールマチャクラ（亀のチャクラ）と呼ばれるヤントラ[3]がしばしば述べられることとなる。本論考の目的は，タントラ儀礼において用いられるこのクールマチャクラの概略を示し，その成立の背景を探ることにある。あらかじめ結論を言うならば，クールマチャクラは *Bṛhatsaṃhitā*（BS）などの初期の占術文献に見られるクールマヴィバーガ（亀状地域区分）が，スヴァラの学（svarodaya）などをも取り込んだ後期の占術文献を経由し[4]，やがてシャークタを中心とするタントラ文献に取り入れられたものと考えられる。

そうした議論に入る前に，まずはタントラ文献におけるクールマチャクラを概観することとしよう。

1　*Taittirīyasaṃhitā* V.2.8.5 ; cf.山田［2005］pp.55－56.

2　cf. Rüping［1970］pp.6ff.

3　「ヤントラとは，一般的には直線や円の集合として描かれる幾何学的図形を指すものとされるが，そこには単なる円や三角形などのシンプルなものから，いくつもの図形が組み合わされたもの，また彩色されてきわめて緻密なディテールを持つもの，あるいは立体的に鋳造されたものといった風に多くのヴァリエーションが存在する。（井田［2005］p.144）」本論稿において，チャクラという語はヤントラと同義的に用いられている。cf. Bühnemann［2003］pp.49－51.

4　Sakaki［2005］p.139；Pingree［1981］pp.77－79.

1．タントラ文献におけるクールマチャクラ

現存するタントラ文献の中でクールマチャクラに言及する最初期の資料は，シャークタの中で12－14世紀頃に成立した雑多な集成，*Śāradātilaka*（ŚT）であると思われる[5]。このタントラの第二章においては星宿のチャクラ（nakṣatracakra），十二宮のチャクラ（rāśicakra），アカタハチャクラ（akathahacakra）[6]など，種々のチャクラが述べられているが，クールマチャクラもまたその中に含まれている。ŚT によれば，それは３×３の九つの枡目によって構成される，四角形のヤントラとして描かれるべきものである。その中央の枡目は亀の甲羅に，そして周囲の八つの枡目はそれぞれ頭，尻尾，四本の足と両脇腹に，なぞらえられる。この九つの枡目の各々には，サンスクリットのアルファベットが配置される（図１）。

caturasrāṃ bhuvaṃ bhittvā koṣṭhānāṃ navakaṃ likhet //132//
pūrvakoṣṭhādi vilikhet saptavargān anukramāt /
ḷakṣam īśe madhyakoṣṭhe svarān yugmakramāl likhet //133//
dikṣu pūrvādito yatra kṣetrākhyādyakṣaraṃ sthitam /
mukhaṃ tat tasya jānīyād dhastāvubhayataḥ sthitau[7] //134//
koṣṭhe kukṣī ubhe pādau dve śiṣṭaṃ puccham īritam /

5　Goudriaan [1981] pp.134ff.

6　これらのチャクラについては，ŚT に先行する *Kurārṇavatantra* の15章においても述べられている。cf. Bühnemann [1992] pp.70ff.

7　底本 sthitam。ここは Malaviya 版に従う。

8　後代の文献には，アルファベットの配置法において ŚT などと大きく異なる例が見出される（図２）。

kūrmākāraṃ mahācakraṃ catuṣpādasamāvṛtam /
muṇḍe svarā dakṣapāde kavargaṃ vāmapādake //74//
cavargaṃ kīrtitaṃ paścād adhaḥpāde ṭavargakam /
tadadhas tu tavargaṃ syād udare ca pavargakam //75//
yavāntaṃ hṛdaye proktaṃ sahāntaṃ pṛṣṭhamadhyake /
lāṅgūle śatrubījañ ca kṣakāraṃ liṅgamadhyake //76//
likhitvā gaṇayen mantrī cakraṃ kalimalāpaham /

krameṇānena vibhajen madhyastham api bhāgataḥ //135//

四角形をした地面を分割して，枡目を九つ描くべきである。東の枡目からはじめて，七つの行（varga）を，順序に応じてそれぞれ書くべきである。北東（īśa）に ḷa・kṣa を［書くべきである］。中央の枡目の中に，八方に東から，母音を二つづつ順序に応じて書くべきである。土地の名前の最初の文字が位置するところ，そこがその（亀の）頭であると知るべきである。［頭の］両脇に位置する枡目が両手である。両脇腹，二つの足。残ったのが尻尾であると述べられる。この順序で，中央にある［母音］もまた，部分ごとに分割するべきである。（ŚT 2.132cd－135）

まず ŚT はサンスクリットの子音を各々五ないし四つのアルファベットからなる，七つの行（varga）に分ける。この七つの子音グループは，クールマチャクラの東の枡目からはじめて時計回りに七枡，北の枡目まで配置される。そして残った北東の枡目には，ḷa と kṣa という二つの子音が配置される。このように子音文字で周囲の八枡が埋められた後，最後に残った中央の枡目には16の母音が配置される。この16母音は，a 文字から順に二つづつの八グループに分けられて，中央の枡目の中に東から時計回りで八方位にそれぞれ配置される[8]。

四本の足に囲まれた亀の形をした，偉大なるチャクラが［描かれるべきである］。頭には母音がある。右足に ka 行を，左足に ca 行を持つと述べられる。西側の後ろ足に ṭa 行を，そしてそれ（右前足）の後ろに ta 行を持つべきである。そして腹に pa 行を，心臓に ya［からはじまり］va に終わるもの（ya, ra, la, va）を持つと言われる。甲羅の中央において sa・ha に終わるもの（śa, ṣa, sa, ha）を持ち，リンガを中央に持つ尻尾において，敵の種子と，kṣa の文字を描いて，修行者は，カリ期の穢れを払うチャクラを考えるべきである。（*Rudrayāmala* 3. 74－77ab）

またいくつかの資料においては，この中央の枡目がさらに３×３の九枡に分割され，その周囲八枡に二つづつ八組の母音が配置されるようになる（図３）。

madhye koṣṭhe tataḥ kuryāt pūrvavan navakoṣṭhakam /
pūrvād īśānaparyantaṃ ṣoḍaśasvaram ālikhet //45//

それから中央の枡目の中に，前のように九つの枡目を作るべきである。東から北東に終わるまで，16の母音を書き入れるべきである。（*Kaulāvalīnirṇaya* 2. 45）

こうしてアルファベットを伴った３×３枡からなる方形のチャクラが描かれた後，その周囲八枡の中のどの枡目が亀の頭となるかが決定される。それは，占いの対象となる土地などの名前の最初の文字によって決められる。例えば占いの対象が Videhanagara という名の街であったなら，その最初の子音である V(a) 文字に対応する北西の角の枡目が頭ということになる。このようにして頭の位置を決めたなら，他の枡目もまた自動的に亀の身体各部と対応付けられる。先の例で言えば，北西に頭があるとして，それを挟む北と西の辺の枡目がそれぞれ右前足と左前足，北東と南西の枡目が左右のわき腹，東と南の枡目が右後ろ足と左後ろ足，そして南東の枡目が尻尾となるだろう。

以上のようにして亀の頭の位置を確定した後，この亀と実際の土地の位置関係を照らし合わせて，それぞれの場所の吉凶を占うことになる[9]。

> mukhastho labhate siddhiṃ karasthaḥ svalpajīvanaḥ /
> udāsīnaḥ kukṣisaṃsthaḥ pādastho duḥkham āpnuyāt //136//
> pucchasthaḥ pīḍyate mantrī bandhanoccāṭanādibhiḥ /
> kūrmacakram idaṃ proktaṃ mantrāṇāṃ siddhisādhanam //137//
> 頭の場所にいる者は，成就を獲得する。手の場所にいる者は，僅かな寿命を持つ。腹の場所にいる者は，どちらでもない。足の場所にいる者は，苦を得るだろう。尻尾の場所にいる修行者は，捕縛，追放などによって害されるだろう。ここにマントラの成就を獲得させるクールマチャクラが述べられた。(ŚT 2.136－137)

このクールマチャクラにおける頭の位置は，しばしば「灯明の位置(dīpasthāna)」と呼ばれ，最も吉祥な場所として理解される[10]。この場所で行われた儀礼は，他の場所で行われるよりも効果的であると考えられている。つ

9　cf. TR 5. 94cd－95.

10　tatkūrmasya mukhaṃ devi dīpasthānaṃ prakīrtitam /
dīpyante yatra manavo dīpasthānaṃ tatas tu tat //117//

まりクールマチャクラは，街や村などの特定の地域内を九分割した上で，どの場所が儀礼を行うに最も相応しい場所であるのかを確認するものであると言えよう。こうした性格が最も顕著に示されるのは，ŚT と同じシャークタの伝統の中で16世紀に成立し，それ以降強い影響力を及ぼした *Jñānārṇavatantra* (JA) である[11]。

dīpasthānaṃ mayā proktaṃ triṣu lokeṣu durlabham /
dīpasthānaṃ pure paśyed grāme vā viṣaye 'pi vā //60//
yatra kutrāpi vā paśyet kāryasiddhir bhavet priye /
kṣetrādhipasya nāmnā hi dīpasthānaṃ vicārayet //61//
dīpasthāne japaṃ kuryād dhomaṃ ca phaladaṃ sadā /
kuṇḍaṃ sulakṣaṇaṃ kuryād īśāne maṇḍapasya ca //62//

私によって，三つの世界において獲得され難き灯明の場所が述べられた。街，あるいは村，あるいはまた国の中に，灯明の場所を見出すなら，あるいはまたどこであれ見出すなら，そこでなされるべきことが成就するだろう。愛しい者よ。土地の支配者の名前によって，灯明の場所を調べるべきである。灯明の場所において，ジャパを，そして常に果報をもたらすホーマを行うべきである。そして儀礼小屋の北東に，よい形の火炉を作るべきである。(JA 10. 60－62)

これらのタントラ文献において，クールマチャクラは常に修行者 (sādhaka) 達の，成就を目的とした実践 (sādhanā) の中で使用されるものとされる。彼ら修行者は，クールマチャクラを用いて，特定の地域内のどの場所において儀礼を行うべきかを見定める。ゆえにこの占いは，その後に行われる儀礼の，準備段階の一部をなすものと考えられる。

その亀の頭が，灯明の場所であると言われる。女神よ。そこで人々は照らされるので，ゆえにそれは灯明の場所である。(*Paramānandatantra* 21. 117)

11 Goudriaan [1981] pp.67ff.

ではこのようなクールマチャクラがどのような経緯を経てタントリズムにおいて用いられるに至ったのか。その最も古い姿は，占術文献に見られるクールマヴィバーガにある。

2．クールマチャクラ成立の背景：占術文献

2．1．*Bṛhatsaṃhitā* におけるクールマヴィバーガ

タントラ儀礼において用いられるクールマチャクラは，五世紀前後に成立したBSや*Atharvavedapariśiṣṭa*（AVPari）[12]が述べるクールマヴィバーガ（亀状地域区分）にその原型を見て取ることができる。それは，インド全域を巨大な亀として見立てるものである。ここでの亀は，クールマチャクラの場合と同様に八方位＋中央からなる九つの部位を持つもの，つまり甲羅を中心としてその周囲に頭，両前足，両脇腹，両足，尻尾を持つものとして想定されている。そして重要なのは，この九部位が各々に実際のインド世界の諸地域と対応付けられることである（図4）。

nakṣatratrayavargair āgneyādyair vyavasthitair navadhā /
bhāratavarṣe madhyaprāgādivibhājitā deśāḥ //
九つに区分されたアーグネーヤ宿（＝クリッティカー宿）にはじまる星宿三つ組によって，インド世界の中で，諸地方が，中央・東などに区分された。(BS 14.1)

12　cf. AVPari ch.56

13　本稿はこれらの地域の分類については，煩瑣を避けて言及しない。詳しくはLewis [1967] 参照のこと。そこでLewisは，クールマヴィバーガの二つの型に関して，以下のように述べている。

Kūrmavibhāgaの文献には，長いものと短いものとの二つのリストを持つものがある。前者はVarāhamihiraの*Bṛhatsaṃhitā*や，*Mārkaṇḍeyapurāṇa*, *Parāśaratantra*に見られ，一方後者は*Atharvaveda*のpariśiṣṭaや,*Garuḍapurāṇa*，そして*Viṣṇudharmottarapurāṇa*に見られる。(Lewis [1967] p.85.)

bhadrārimedamāṇḍavyasālvanīpojjihānasaṃkhyātāḥ /
maruvatsaghoṣayāmunasārasvatamatsyamādhyamikāḥ // 2 //
māthurakopajyotiṣadharmāraṇyāni śūrasenāś ca /
gauragrīvoddehikapāṇḍuguḍāśvatthapāñcālāḥ // 3 //
sāketakaṅkakurukālakoṭikukurāś ca pāriyātranagaḥ /
audumbarakāpiṣṭhalagajāhvayāś ceti madhyam idam // 4 //
バドラ，アリメーダ，マーンダヴァ，サールヴァ，ニーパ，ウッジハーナ，サンキャータ，マル，ヴァッツァ，ゴーシャ，ヤームナ，サーラスヴァタ，マッツヤ，マードゥヤミカ，マートゥラカ，ウパジョーティシャ，ダルマーラヌヤ，そしてシューラセーナ，ガウラグリーヴァ，ウッデーヒカ，パーンドゥグダ，アシュヴァッタ，パーンチャーラ，サーケータ，カンカ，そしてクル，カーラコーティ，クルラ，パーリヤートラ，アウドゥンバラ，カーピシュタラ，そしてガジャーフヴァヤというこれらが，中央部である。(BS 14.2－4)

このように中央の地域，すなわち亀の甲羅に対応する地域の名前を列挙した後，BS は残りの八つの部位に対応する地域の名前を順に列挙する。つまりクールマヴィバーガは，当時のインド世界を九つの地域へと大まかに分類するものであると言えよう[13]。そしてさらに，この九つの地域は，三つづつからなる九グループに分けられた27の星宿（nakṣatra）とも関係付けられている。この星宿との対応関係に基づいて，BS および AVPari[14]は各地域の吉凶判断を行うの

14　同様の記述は AVPari において以下のようにある。
kṛttikārohiṇīsaumyaṃ madhyaṃ kūrmasya nirdiśet // śeṣān ṛkṣavibhāge tu trikaṃ prati vinirdiśet // sāketamithile mekalālayāvahichattranāgapuraṃ kāśipāriyātrakurupāñcālāḥ / /atha kosalakauśāmbītīraṃ pāṭaliputraṃ kaliṅgapurapṛthivī maṇḍalamadhye 'bhihate 'bhihanyāt //
クリッティカー宿，ローヒニー宿，サウムヤ宿を亀の中央に割り当てるべきである。残りを，星座の区分の中に三つごとに，それぞれ割り当てるべきである。サーケータ，ミティラー，メーカラーラヤー*，アヒチャトラ，ナーガプラ，

である。

vargair āgneyādyaiḥ krūragrahapīḍitaiḥ krameṇa nṛpāḥ /
pāñcālo māgadhikaḥ kāliṅgaś ca kṣayaṃ yānti //32//
āvanto 'thānarto mṛtyuṃ cāyāti sindhusauvīraḥ /
rājā ca hārahauro madreśo 'nyaś ca kauṇindaḥ //33//
アーグネーヤ宿（クリッティカー宿）などの［星宿の］組が，不吉な惑星に掩蔽されることによって，王達は，順次破滅に赴く。パーンチャーラの王，マガダの王，カリンガの王が，そしてアヴァンティの王，アナールタの王が，死へ赴く。シンドゥ地方のサウヴィーラの王，ハーラハウラの王，マドラの主，そしてさらにカウニンダの王が。(BS 14.32－33)

BS は，それぞれの星宿が土星によって掩蔽される時，それはその星宿に対応する地域の王が死ぬ予兆であると説いている。こういった予兆論は，後のプラーナ文献などにもしばしば見出され[15]，例えば *Mārkaṇḍeyapurāṇa*（MārP）では，地名などを大幅に増補したそれが述べられている[16]。そうした比較的新しい文献においては，不吉の徴に対して何らかの鎮静の儀礼が行われるべきであると説かれることが多い。これは BS や AVPari などの初期の占術文献には見られなかったものである。

カーシー，パーリヤートラ，クル，パーンチャーラ，そしてコーサラ，カウシャーンビー，ティーラ，パータリプトラ，カリンガプラ，プリティヴィーは，中央の領域が害された時，打ち負かされるだろう。(AVPari 56. 1－2.)
*テキストに検討の余地あり

15　etatpīḍā amī deśāḥ pīḍyante ye kramoditāḥ /
yānti cābhyudayaṃ vipra grahaiḥ samyagavasthitaiḥ //
これらの［星宿が］掩蔽されたなら，順次述べられたこれらの地域が，苦しめられる。そして惑星が正しい位置にある事によって，優位に至る。詩人よ。(MārP 58. 55)
cf. *Nāradapurāṇa* 1.56. 739cd－745.

16　それは *Adbhutasāgara* pp.267以下にも引用されている。

tasmād graharkṣapīḍāsu deśapīḍāṃ vinirdiśet /

tatra snātvā prakurvīta dānahomādikaṃ vidhim /

それゆえに，惑星や星座が掩蔽された場合，地方の不幸を宣言するべきである。その時は水浴してから，布施やホーマなどの儀軌を執行するべきである。(MārP 58.80)

2．2．*Narapatijayacaryā* におけるクールマヴィバーガ

インド全域を九つに分けた上で占いを行うクールマヴィバーガは，やがて12世紀に至って新しい展開を見せる。1177年に成立した *Narapatijayacaryā* (NJC) と呼ばれる占術文献は[17]，いわゆるスヴァラの学の関連文献の代表格とも目されるものであり，「文字の配列のひとかたまりを方角や星宿，動物などに関係付けて吉凶を判断し占うものである」という[18]。その Cakrabandha の章の中で，クールマチャクラが言及されている。

NJC はそこで最初にメール山を中心とした神話的なインドの世界像を示し，その後にインド全域を支える亀について言及する (NJC 10. 1－11)[19]。そしてその後，大地を支えるこの大亀に対応するクールマチャクラを描くことが指示される。それは，東を向いた，九つの身体部位からなるものとして説明されている。

kūrmākāraṃ likhec cakraṃ sarvāvayavasaṃyutam /

pūrvabhāge mukhaṃ tasya puchaṃ paścimamaṇḍale //12//

pūrvāparaṃ likhed vedhaṃ vedhaṃ cottaradakṣiṇe /

---

17 この NJC が依拠したとされる *Yuddhajayārṇava* や *Ādiyāmala* などは，おそらく10世紀を下らない。この *Yuddhajayārṇava* の内容の一部は *Agnipurāṇa* の一部分に収録されているが，その中にはクールマチャクラに関する記述も見出される。cf. *Agnipurāṇa* 123. 9.

18 榊[2004]p.133.

19 NJC はこのクールマチャクラを説くにあたって *Kośalāgama* および *Ādiyāmala* を参照しているとされる。cf. NJC 10.1,11,47.

īśānarākṣase vedhaṃ vedham āgneyamārute //13//
nābhiśīrṣacatuṣpādakukṣipuccheṣu saṃsthitam /
tārātrayāṃkite tasmin sauriṃ yatnena cintayet //14//
亀の姿をしたチャクラを，全ての部分を備えたものとして，描くべきである。東の部分にそれの頭を，西の領域に尻尾を［描くべきである］。東と西に穴を，そして北・南に穴を，北東・南西に穴を，南東・北西に穴を描くべきである。［それは，亀の］臍，頭，四本の足，脇腹，尻尾に位置づけられる。三つ［づつ］の星宿でしるしづけたそこに，土星を努めて思い浮かべるべきである。(NJC 10.12－14)

このようにNJCもまた，クールマチャクラを九部位からなる亀として描き，その九部位それぞれに対して星宿，インド諸地域の地名を関連付ける。そしてこの各星宿が土星によって掩蔽された場合，それは各地域の不吉な予兆であると考えられる。

kṛttikā rohiṇī saumyaṃ kūrmanābhigataṃ trayam /
sāketaṃ mithilā campā kauśāṃbī kauśikī tathā //16//
ahicchatraṃ gayā vindhyamantarvedī ca mekhalā /
kānyakubjaṃ prayāgaś ca madhyadeśo vinaśyati //17//
クリッティカー宿，ローヒニー宿，サウムヤ宿の三つは，亀の中心にある。［それらの星宿が土星に掩蔽される時］，サーケータ，ミティラー，チャンパー，カウシャーンビー，カウシキー，アヒッチャトラ，ガヤー，ヴィンドゥヤプラデーシャ，メーカラー，カーヌヤクンジャ，プラヤーガ，マドゥヤデーシャが滅びる。(NJC 10.16－17)

このようにNJCが説くクールマチャクラとは，まさしくBS以来の伝統に連なるクールマヴィバーガに他ならない。ただしNJC 10. 14における，土星を「思い浮かべるべき」という記述には，注意が必要であろう。それは，この実践が

単に吉凶を占うだけのものではなくて，より積極的な意味合いを担っていた可能性を示唆するからである[20]。この場合，クールマチャクラを準備することは，実際の星宿と土星の位置関係を観察して，それを何らかの実際の出来事の前兆として解釈するという占術の範疇を越えた，より現実に対して関与的なある種の実践，瞑想儀礼としての性格を持つことになるからである。

NJC は，BS などのクールマヴィバーガとよく似た大地の亀としてのクールマチャクラを説明した後，さらに各地域ごとの吉凶を占うためのクールマチャクラをも述べている。それは，国のクールマチャクラ（10. 38），村のクールマチャクラ（39－40），領地のクールマチャクラ（41），家のクールマチャクラ（42－46）という四種に分けられる。このような区分は，タントラ文献においても一般的なものである。例えば既述の JA 10. 60には，街，村，国という三種の地域が占いの対象として説かれていたし，また *Tantrarājatantra*（TR）5. 90にも最高[21]，国，村，家という四種のクールマチャクラが述べられている[22]。つまり NJC では，BS のようなクールマヴィバーガと，タントラ的なクールマチャクラとが併記されているとも言えるだろう。

[Gṛhakūrmacakra]

gṛhakūrmaṃ samālikhya gṛhadvāramukhasthitam /

---

20 Gaṇeśadatta は，NJC 当該箇所に対して「この九つの場所に，三つづつの星宿を配置（nyās）して」と注を付しており，この箇所を現実に対して関与的な，何らかの実践として理解する可能性を支持している。

21 この最高の亀とは，NJC で述べられた世界を支える亀と同じものと考えられる。TR の注釈 *Manorama* はこれを次のように説明している：

paraḥ kūrmaḥ pañcāśatkoṭiyojanavistīrṇāyāḥ pṛthivyā dhārakaḥ sthiraḥ kūrmaḥ /
最高の亀とは，５億ヨージャナ広がった大地を支える，不動の亀である。（*Manorama* p.104, ll. 11－12）

22 prathamas tu paraḥ kūrmas tato deśagatas tathā /
grāmago gṛhagaś ceti caturdhā tadvyavasthitiḥ //90//
さて第一に最高の亀，それから地方にいる［亀］，そして村の［亀］，家の［亀］という四種がその区別である。（TR 5.90）

gṛhanāmarkṣapūrvaṃ tu kṛtvā vīkṣyaṃ śubhāśubham //42//
gṛhamadhyagataḥ sauriḥ śokasaṃtāpakārakaḥ /
dvāre vidyutprado jñeyaḥ pāvake vahnidāyakaḥ //43//
jñeyo mṛtyuprado yāmye rākṣase rākṣasād bhayam /
vāruṇe śubhado jñeyo vāyavye śūnyuatāpradaḥ //44//
arthalābhapradaḥ saumye śāmbhave sarvasiddhidaḥ /
saurir balādhiko duṣṭaḥ svalpavīryaḥ śubhāvahaḥ //45//
samakālaṃ pīḍayed yatra bhānujaḥ kūrmapañcakam /
tatra sthāne mahāvighnaṃ jāyate nātra saṃśayaḥ //46//
duṣṭasthānagate maṃde kartavyaṃ tatra śāṃtikam /

家の入り口を頭とする家の亀を描いて，そして家の名前の星座を東とするなら，幸運不運が見分けられる。土星が家の中央にあれば，憂いと苦痛をもたらす。入り口にある時，稲妻をもたらすと知られるべきである。南東にある時，火をもたらす。南にある時，死をもたらすと知られるべきである。南西にある時，ラークシャサの恐れを［もたらす］。西にある時，良いことをもたらすと知られるべきである。北西にある時，何ももたらさない。北にある時，財の獲得をもたらす。北東にある時，一切の成就をもたらす。力が強すぎる土星は罪をもたらし，力が僅かならば良いことをもたらす。同時に土星が，亀のうち五つを掩蔽するなら，その場所で，大きな障害が生じる。このことに疑いはない。土星が悪い場所にいるなら，その時，鎮静法（śānti）が行われるべきである。(NJC 10.42－47ab)

特定の地域内での吉凶を占うという点において，NJC のクールマチャクラは，タントラ文献におけるそれと一致する。しかし NJC の場合，各土地の吉凶は常に星宿と土星との関係によって占われ，ヤントラに配したアルファベットが参照されることはない。そしてさらにこのクールマチャクラは場所の吉凶を占うことに主眼をおくものであって，ŚT などのように何らかの儀礼実践の予備段階に用いられるものとは違っている。不吉の兆しが現れた場合に，鎮静

法を行うべしとするのも，タントラ的というよりはむしろ MārP などに見られる新しいクールマヴィバーガに近いものと言えるだろう。

以上をまとめるなら，クールマヴィバーガは BS，AVPari などの初期の占術文献にその起源を持ち，やがて NJC や，それが依拠した後期の占術文献において発展した。これが13世紀以降のシャークタに属するタントラ文献に取り込まれ，土地の名前とアルファベットの対応関係に基づいたタントラ的なクールマチャクラへと発展するのである。

3．ヤントラにおけるアルファベット配置の類例：mantrasaṃskāra

特定の対象（例えば人物や土地など）の名前の最初の文字を，ヤントラに配したアルファベットと対照してその後の実践の成否，吉凶を占うという手法は，実はクールマチャクラが導入される以前から，タントラ儀礼においては既に一般的であった。その例は枚挙に暇がないが，クールマチャクラとの関わりにおいて特に参考になるのは，*Kulārṇavatantra*（KA）の15章に述べられた，マントラの浄化儀礼（mantrasaṃskāra）と呼ばれる実践である。それは実践者が，自分の使うマントラを有効なものとするために行う一連の儀礼である[23]。

KA はそれを「生む（janana）」にはじまる10のプロセスから構成されるものとして述べている。

kathyante daśa saṃskārā mantradoṣaharāḥ priye /
jananaṃ jīvanaṃ paścāt tāḍanaṃ bodhanaṃ tataḥ //71//
abhiṣeko'tha vimalīkaraṇāpyāyane tathā /
tarpaṇaṃ dīpanaṃ guptiḥ saṃskārāḥ kulanāyike //72//

マントラの過誤を払う，10の浄化儀礼が語られる。愛しい者よ。浄化儀礼とは，「生む」，「命を与える」，それから「叩く」，そして「おこす」，「水

23 cf. *Netratantra* 18. 6－8；*Tantrāloka* 18.17cd－18；こうしたプロセスについて，詳しくは Gupta [1979] pp.108－109.

をかける」，さらに「きれいにする」，そして「大きくする」，「満足させる」，「燃え上がらせる」，「隠す」である。一族の女主人よ。(KA 15. 71－72)[24]

ここで述べられている10の浄化儀礼の中でも，最初に行われる「生む」プロセスにおいて，マートリカーチャクラと呼ばれるヤントラが用いられる(図5)。このヤントラは，クールマチャクラと全く同じアルファベットの配置を伴っている。そのことがŚTにおいて次のように述べられている[25]。

vyomendvaurasanārṇakarṇikam acāṃ dvandvaiḥ sphuratkesaraṃ
patrāntargatapañcavargayaśalārṇāditrivargaṃ kramāt /
虚空（h）と月（s），auと舌の文字（ḷ）を子房に持ち，母音を二つづつともなって脈動する花糸を持ち，順次，五つの行（varga）とya・śa・laの文字ではじまる三つの行を花弁の中に持つ［マートリカーチャクラを，描くべきである］。(ŚT 6. 10ab)

このようにマートリカーチャクラの八方の花弁に対して，東から順にそれぞれ八つの行（varga）のアルファベットを配置し，中央の円の中に，16の母音を二つづつに分けて八方位に配置する。hsauḥという種子マントラを除けば，このヤントラはタントラ的なクールマチャクラと同様のアルファベットの配置を伴うものである。このヤントラは，クールマチャクラの導入される前から，タントラ儀礼の中で用いられていた。こうしたヤントラの存在が，タントラ的なクールマチャクラの形成において一つの要因となったことは，想像に難くない[26]。

24　ŚT 2.112－113とほぼ一致。

25　cf. *Dakṣiṇāmūrtisaṃhitā* 8.20－23.

26　タントラ的なクールマチャクラとは文脈を異にするが，亀の身体を模したヤントラにマントラを配し，それを何らかの呪術的な実践に使う例が*Agnipurāṇa* 315.1－6abに見出される。

4．考　察

以上見てきたように，BS などの初期占術資料に見られるクールマヴィバーガは，NJC のような後期の占術文献を経由して，ŚT などのシャークタの文献に述べられるタントラ儀礼の中に位置を占めるに至った。このようなクールマチャクラの展開は，伝統の中で一つのモチーフがその置かれた文脈の変化に応じて姿を変えていく典型的な例であると言えるだろう。

BS や AVPari に見られるクールマヴィバーガは，インド世界の全域を視野に入れた上で各地の凶兆を占う，極めて広域的な視点を持つものと言えるだろう。加えて BS において，凶事とはすなわち各地域の王の死のことである。これらの事実から考えて，この時期の戦術文献が述べるクールマヴィバーガが，王権と密接に結びついていたことは明白であろう。実際，BS を著した Varāhamihira は宮廷付きの占星術師であったと言われている[27]。おそらくそうした宮廷占術師の職務は，王室付きの祭官つまり儀礼執行者とは異なったものであっただろう。そしてもしも彼ら占術師の職掌が占いに特化したものであったのなら，凶兆に対してどのような鎮静法が行われるべきかという点に関する記述が，この時期の占術文献に見出されないのは，むしろ当然であるかもしれない。

これに対して NJC は，国，町村，自分の土地や家屋などを占いの対象とする。つまり占いの対象が，より局地的な方向へ移っているのである。初期の占術文献が，国家や王達のために行われる占術の体系を主としたものであったのに対し，新しい NJC などの文献は，大衆的な占いも含んだ，より広範な占術の集成という性格を持っている。つまり NJC に見られるこのクールマチャクラを用いた占術の局地化とは，かつて宮廷において行われていた占術が，町村や個人の家屋などをも対象として行われるようになった時代状況，つまりクールマヴィバーガを用いた占術の普及，大衆化とでも言うべき状況を示しているように思われる。それゆえこの時期のクールマチャクラにおける凶事とは，王

27　Pingree [1981] p.32.

の死などではなく，雷や出火，富に関わるものになっているのである。

そしてこのクールマチャクラを用いた占術は，さらに ŚT 以降のタントラ文献に取り入れられて新しい展開を見せる。そこでのクールマチャクラはもはや星宿との関係性を失って，その代わりに種子マントラ（アルファベット）を用いたタントラ的な実践へと姿を変えている。この時，それはもはや予兆によって未来を占うものですらなくなっている。それは成就法などの儀礼を執り行うのに適した場所を探るために，一連の儀礼の前に予備的に行うべきものとして，タントラの儀礼システムの中に組み込まれているのである。この段階において，クールマチャクラは，もはや BS のように占術を専門に行う者達ではなく，儀礼の専門家達の間において用いられるものとなっている。

文献及び略号表

Agnimahāpurāṇam, Delhi : Nag Publishers, 1985.

AVPari : *The Pariśiṣṭas of the Atharvaveda*, ed. by G. Bolling and J. Negelein, Leipzig, 1909.

KA : *Kulārṇavatantra*, ed. by Tārānātha Vidyāratna, Delhi : Motiral Banarsidass Publishers, 1965.

Kaulāvalīnirṇaya, ed. by Paramahansa Majjñānanda, Chowkhamba Sanskrit Series Office, Varanasi, 2005.

JA : *Jñānārṇavatantram*, Ram Ramjan Malaviya, Krishnadas Academy, 2001.

TR : *Tantrarāja Tantra*, ed. by Lakshmana Shastri, Delhi : Motiral Banarsidass Publishers, 1997.

Dakṣiṇāmūrtisaṃhitā, ed. by S. Krishnamurthi Sastri, Sarasvati Mahal Library, 1996.

NJC : *Narapatijayacaryāsvarodaya of Śrī Narapatikavi*, ed. by Gaṇeśadatta Pāṭhaka, Vanarasi, 2002.

Nāradīyamahāpurāṇam, Delhi : Nagpublishers, 1984.

Paramānandatantra with the Commentary Saubhāgyānandasandoha by Maheśvarānandanātha, ed. by Raghunātha Miśra, Varanasi, 1985.

BS : *Bṛhatsaṃhitā with Bhaṭṭotpala's Commentary*, vol.1, Banarasi, 1968 (1895).

MārP : *Mārkaṇḍeyamahāpurāṇa*, Delhi : Nag Publishers, 1984.

Rudrayāmalaṃ (*Uttaratantraṃ*), Part 1, Delhi : Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1999.

ŚT : *Śāradātilaka of Śrī Lakṣmaṇa Deśikendra with the Commentary Padārthādarśa by Śrī Rāghava Bhaṭṭa,* Part 1, ed. by K. Tripāthī, Vanarasi, 1997 ; *Śāradātilaka-tantram of Lakṣmaṇa Deśikendra,* part 1 , ed. by Malaviya, S., Delhi, 2003.

Bühnemann, G. [1991] "Selecting and Perfecting Mantras in Hindu Tantrism" Bulletin of the School of Oriental and African Studies, LIV part 2, pp.292－306.

Bühnemann, G. [1992] "On Puraścaraṇa : Kulārṇavatantra, Chapter 15", *Ritual and Speculation in Early Tantrism*, SUNY, pp.61－106.

Bühnemann, G. [2003] "Maṇḍala, Yantra and Cakra : Some Observations" *Maṇḍalas and Yantras in the Hindu Traditions*, pp.13－56.

Goudriaan, T., Gupta, S. [1981] *Hindu Tantric and Śākta Literature*, A History of Indian Literature vol.2, fasc.2, Wiesbaden : Otto Harrassowitz.

Gupta, S., Hoens, D. J., Goudriaan, T. [1979] *Hindutantrism*, Leiden / Köln : E. J. Brill.

井田克征 [2005]「ヒンドゥータントリズムにおけるチャクラプージャー」『宗教研究』346, 東京, pp.141－162.

Lewis, C. S. [1967] "The Schorter Kūrmavibhāga Texts of the Purāṇas" *Purāṇa*, Varanasi, pp.84－97.

Pingree, D. [1981] *Jyotiḥśāstra : Astral and Mathematical Literature*, A History of Indian Literature vol.6, fasc.4, Wiesbaden : Otto Harrassowitz.

Rüping, K. [1970] *Amṛtamanthana und Kūrma-Avatāra : Ein Beitrag zur puranischen Mythen- und Religionsgeschichte*, Wiesbaden : Otto Harrassowitz.

榊和良 [2004]「『全哲学綱要』に現れた「スヴァラの学」」『印度哲学仏教学』19, pp.132－156.

Sakaki, K. [2005]"Yogico-tantric Traditions in the Ḥawḍ al-Ḥayāt", *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, 17, Tokyo, pp.135－156.

Tagare G. V. [1981] *The Nārada-purāṇa*, Part II, Ancient Indian Tradtion and Mythology Series, Delhi : Motiral Banarsidass Publishers.

山田智輝 [2005]「*vāstavyà-, vāstuhá-, vāstupá-*——置き去りにされた居住地に関する記述を巡って」『論集』32, pp.53－71.

キーワード：

クールマチャクラ，タントリズム，占術，*Bṛhatsaṃhitā, Narapatijayacaryā*

पूर्व

ईशान	लक्ष	क, ख, ग, घ, ङ	च,छ,ज,झ,ञ	आग्नेय
उत्तर	श,ष,स,ह	मध्य अ आ इ ई उ ऊ ऋ ॠ ऌ ॡ ए ऐ ओ औ अं अः	ट,ठ,ड,ढ,ण	दक्षिण
वायव्य	य,र,ल,व	प,फ,ब,भ,म	त,थ,द,ध,न	नैर्ऋत्य

पश्चिम

図１：クールマチャクラ（ŚT 2.132cd－137）；Malaviya [2003] p.121.

पूर्व

पश्चिम	दक्षपाद क ख ग घ ङ	मुख अ आ इ ई उ ऊ ऋ ॠ ए ऐ ओ औ अं अः	वामपाद च छ ज झ ञ	दक्षिण
	उदर प फ ब भ म	पृष्ठमध्य श ष स ह	हृदय य र ल व	
	अधःपाद ट ठ ड ढ ण	पुच्छ छ	तदधःपाद त थ द ध न	

पश्चिम

図２：クールマチャクラ（*Rudrayāmala* 3. 74－77ab）；p.67.

ल क्ष	क ख ग घ ङ			च छ ज झ ञ
श ष स ह	अं अः	अ आ	इ ई	ट ठ ड ढ ण
	ओ औ		उ ऊ	
	ए ऐ	लृ लॄ	ऋ ॠ	
य र ल व	प. फ ब भ म			त थ द ध न

図３：クールマチャクラ（*Kaulāvalīnirṇaya* 2.45）；Bühnemann [1991] p.303.

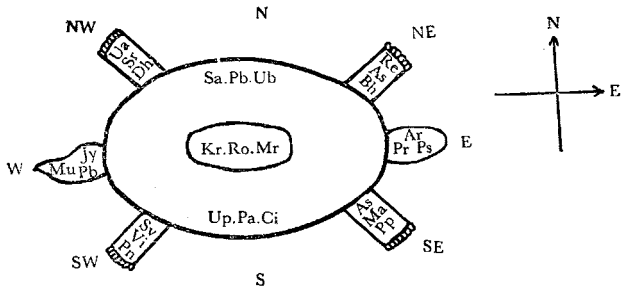

図４：クールマヴィバーガ（*Bṛhatsaṃhitā*）；Tagare [1981] p.867.

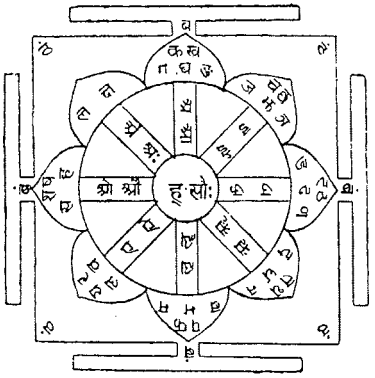

図５：マートリカーチャクラ；Bühnemann, G. [1991] p.300.

On the Development of the *Kūrmacakra*.

Katsuyuki IDA

The purpose of this paper is to survey the development of the *kūrmacakra* (tortoise–shaped mystical figure) which can be found in the ritual manuals of Hindu–tantrism.

Firstly, this figure traces its roots back to *kūrmavibhāga* (tortoise–shaped division of the earth) in the early astrological works such as *Bṛhatsaṃhitā* (BS). Court astrologists read the omens predicting disaster for kings or kingdom with the help of this *kūrmavibhāga* at this time.

Next, *Narapatijayacaryā* (NJC), a text on the divination in the twelfth century, shows the *kūrmacakra* to be the same as the *kūrmavibhāga* in the BS. And it moreover describes *kūrmacakras* used in order to distinguish the auspisious / inauspicious places in the local area such as the city, village, or house. The most likely explanation for this occurrence of new *kūrmacakra* is that the former divination in the court had popularized and propagated to the local community.

Finally, *kūrmacakra* has introduced and adapted to the tantric ritual system. We can find this kind of *kūrmacakra* in *Śāradātikala* which is the famous compendium in the Śākta sect. According to this text and so on, *kūrmacakra* is employed not for the divination, but in the determination of the appropriate place to perform the tantric rituals in this sect. Tantric ritualists therefore used this *kūrmacakra* in the preparatory rites in this context. Then we may conclude that *kūrmacakra* has spread from the groups of astrologers and diviners to the tantric ritualists at this stage.